

## 新人の条件 田中拓也

第五十九回短歌研究新人賞「いつも明るい」が発表された。作者の武田穂佳は日本大学芸術学部文芸学科の一年生の十八歳。初めて作った三十首連作で、新人賞初応募での受賞だから、「新人」という観点でいえば、これほどの新人はめったにいないと思う。

- ・ストリートパーマを君があてたから春が途中で新しくなる
- ・柔らかい雨降りました君のため船のプラモを買った帰りに
- ・便せんが埋まらないなら白いまま夏より先に海へ行こうよ

連作冒頭の三首を掲出した。「ストリートパーマ」をかけた「君」を詠んだ一首目、「船のプラモ」を「君」のためにおみやげに買って帰るといふ二首目、言葉にできないもどかしい想いをひとまず置いて、「海」へ行こうと誘いかける三首目。いずれも十代の作者の等身大の「心」と「言葉」を通した素直な作品と思う。「君」は恋人とは限らず、同性の友人とも弟とも解釈できるフラットな感覚が特徴となっている。

- ・あの夏と呼ぶ夏になると悟りつつ教室の窓が光を通す

・放課後の夏服ひかり満ち満ちていつかあなたの死ぬ日がいやだ  
連作の中核をなしているのが、青春の一回性を詠んだこの二首と思う。二度とやってくるのではない夏を通して、時の流れの切なさを詠んだ一首目、そして、いつか訪れてくる永遠の別れに対する思いを詠んだ二首目。いずれも青春を詠んだ秀歌と思う。も

ちろん、「あの夏は…」は小野茂樹の「あの夏の数かぎりなきぞしてまたたつた一つの表情をせよ」を、「放課後の…」は河野裕子の「ブラウスの中まで明るき初夏の陽にけづれるごときわが乳房あり」を想起させるが、武田の作品世界には独自の世界観を感じさせるものがある。

作者の出身校は岩手県立盛岡第四高等学校。同校の文芸部は知る人ぞ知る文芸部の名門であり、昨年の全国高校生短歌大会（短歌甲子園二〇一五）では団体戦優勝の成績をおさめており、作者はそのチームの中心人物であった。

- ・新しく生まれたい夜  
願いこめ

二十枚の爪すべてを磨く

- ・君になら見せたい秘密の森がある

かなしいわたしも

知られているの

同大会では啄木にならつて三行分かつ書きで作品が発表されているため、あえて大会当時の表記のまま掲出したが、定型のリズムをしっかりと活かした秀歌と思う。もちろん、突然このような作品をビギナーズラック的に詠めるものではなく、作者なりに短歌を詠む（読む）ことを続けていたことにも注目したい。

現在、短歌界の新人の登場の仕方は総合誌や結社誌だけでなく、SNS上など様々な場が現れているが、やはり伝統的な新人賞には注目が集まりやすい。短歌甲子園や高校文芸部での活動を通して、短歌という詩形に対する意識の高い武田穂佳という「新人」の登場を喜ぶとともに、これからの作品にも注目したい。